

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	American Thoracic Society(ATS)2013 International Conference
別タイトル	American Thoracic Society (ATS) 2013 International Conference
作成者(著者)	松澤, 康雄
公開者	東邦大学医学会
発行日	2013.11
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 60(6). p.338 339.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.60.338
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD66553286

American Thoracic Society (ATS) 2013 International Conference



松澤 康雄

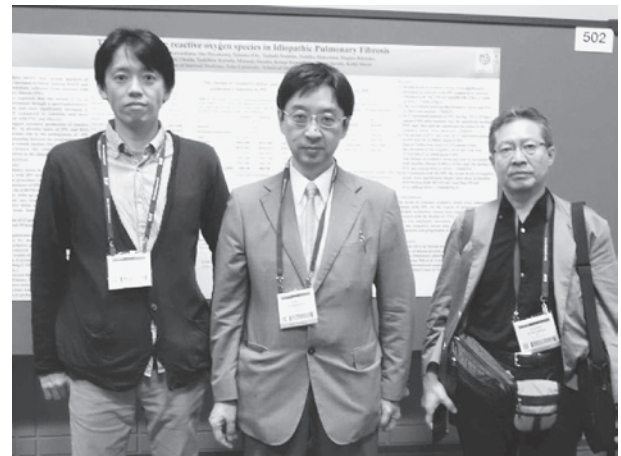
東邦大学医学部内科学講座呼吸器内科学分野 (佐倉)

American Thoracic Society (ATS) 2013 International Conference が5月17~22日まで、フィラデルフィアで開催された。参加者12000人以上の呼吸器内科関連では最大の学会である。昨年は私1人でサンフランシスコに行ったが、今年は、川島辰男先生(非常勤)、若林 徹、早川 翔の4名で参加した。

ATSは、pulmonary, sleep, critical careが3本柱であり、oncologyはほとんど含まれていない。米国では、肺癌は、呼吸器内科医よりも腫瘍内科医の領分のようなのである。演題にも肺癌関連はほとんどない。他方、日本の呼吸器学会と異なり、小児領域も含まれており、往路の飛行機は、大森小児科の佐地先生の一行と一緒にいった。

私は、特発性肺線維症における肺機能と酸化ストレスマーカーの経時的推移に関する研究を演題として応募し、ポスター発表で採択された。今回、初めて、「布ポスター」なるものを作ってみた。紙と違って折りたたむので、国際学会に持っていきやすいとの触れ込みであったが、注意しないと、やはり皺がついてしまう。

到着翌日が発表日である。朝1番から、ポスター前で待機。中央の広いスペースにマイクスタンドがあるのが気になった。通りかかった何人かに質問されたが、とても友好的な感じで、英会話もポスターを指さしながらだとか何とか通じるようで、なかなか良い感触であった。“さて、そろそろお開きかな”とっていると、なぜか、中央のスペースに椅子が並べられ始め、皆が席につきだした。発表者が数人ずつ呼ばれ、1人1人が手ぶらでプレゼンテーション開始。当たり前だが英語である。「え、聞いてないんですけど・・・」昨年の下見の経験に基づき、ポスターを貼ってポスター前で会話するだけと思い込んでいて、原稿も何も準備していなかった。通りすがりの知り合いの先生が、「ポス



ポスターの前で(若林, 松澤, 川島(早川撮影))



最終日の食事

ター&ディスカッション、一番、きついわね、これ」と言いながら立ち去り、そのあとに、本間先生がニコニコしながら、素通りされていかれた。せめて、原稿を用意してお

けば、と思ったが、あとのまつり。とうとう、自分の番がきて、顔面蒼白となりながら、broken englishで何とか終えた。

終了後、プログラムをみると、確かに、“ポスター&ディスカッション”と書いてあった。しかし、届いたメールには、単にポスターで採択されたとだけしか書かれておらず、詳細は後日連絡するというメールも結局届かなかったのである。

同行の若林先生は、症例報告を演題として応募したのだが、残念ながら、採択されなかった。非常にまれで貴重な症例と思ったので、正直、意外であった。

ところが、帰国後、驚くべきことが起こった。何と、若林先生の演題が、「Abstract Scholarship Award」を受賞したとの報告が届いたのである。確かに賞状も届いた。演題採択されておらず、当然、プログラムにも載っていないの

に「受賞」とは？ 問い合わせるべきか否か、迷いつつも、そのままにしているが、世の中広しといえども、演題採択されずに受賞した人はそうそういないことであろう。さすが、当科のエースである。

発表が終わり、フィラデルフィア美術館で、お約束のロッキーステップを駆け上がり、翌日はニューヨーク観光に行った。ニューヨーク1と言われる店のステーキをおいしく頂き、自由の女神にタイムズ・スクエアにグラウンド・ゼロと、一通りのコースを回って、ようやくアメリカに来たという実感がした。

来年のATS 2014はサンディエゴ。国際学会は時間もお金も体力も要するが、得るものも大きい。当科の若手の先生に、できるだけ、国際学会での発表の機会を与えられるように努力していきたいと思う。